

トピック
E子どもの運動・スポーツに対する
保護者の考え方を考える方策

順天堂大学 スポーツ健康科学部 准教授 鈴木 宏哉

文部科学省とスポーツ庁はそれぞれ、子どもの学力・学習状況と体力・運動習慣の実態を把握するために、毎年「全国学力・学習状況調査（小学6年生と中学3年生が対象）」と「全国体力・運動能力、運動習慣等調査（小学5年生と中学2年生が対象）」を実施している。また、現行の学習指導要領では子どもたちの知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をよりいっそう育むことを目指している。変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体をバランスよく育てることが大切である。

一方で、文部科学省（2017）の報告によると、高等学校卒業生における高等教育機関への進学率（過年度卒を含む）は80.6%と過去最高となった。すなわち、義務教育課程において学力と体力は同等に重要視しているものの、こういった統計結果は学力を重視せざるを得ないことを物語っている。

保護者の考え方は子どもの行動に大きな影響を及ぼす。例えば、2015年に実施した前回の調査報告では、保護者の認識や家庭環境が子どもの運動・スポーツや運動あそびと関連している実態が明らかとなった（笹川スポーツ財団，2015）。また、幼少期の身体活動やスクリーンタイム（テレビ・パソコン・ゲーム・携帯端末等視聴時間）に保護者の意識や行動が影響していることが多くの研究で示されている（Xu et al., 2015; Mitchell et al., 2012）。

以上の背景から、本稿では日本における子どもの豊かなスポーツライフの実現に向けて、最近の保護者は子どもの運動・スポーツ実施に対してどのように考えているのかを明らかにした上で、保護者の考え方に影響を及ぼす要因を探った。

E-1

運動・スポーツと勉強に対する保護者の考え方

今回の調査では、学力と体力に関連する子どもの行動について、すなわち「子どもが勉強をすること」と「子どもが運動・スポーツをすること」に関する保護者の考え方を調査した。それぞれの質問に対して「1. あてはまる」から「4. あてはならない」までの4段階で回答を得た結果、4歳から11歳の子どもの保護者では「お子様の今の時期に運動・スポーツをすることは重要だと思う」という質問に、あてはまると回答した割合は67.9%、「お子様の今の時期に勉強をすることは重要だと思う」という質問に、あてはまると回答した割合は47.3%であり、幼稚園・

保育園児と小学生の保護者はこの時期の子どもに対して勉強よりも運動・スポーツを重視している状況がうかがえた。一方で、12歳から21歳の子どもの保護者では、運動・スポーツが56.5%、勉強が67.0%であり、中学生以上の保護者は運動・スポーツよりも勉強を重視している状況がうかがえた。

次に、性別や学校期別に考え方の違いがあるかを検討した。表E-1は「運動・スポーツをすること」と「勉強をすること」に対する保護者の考え方を子どもの性・年齢別に集計した結果である。カイ2乗検定を用いて回答比率

【表E-1】運動・スポーツと勉強に対する保護者の考え方

(%)

運動・スポーツ			子どもが今の時期に運動・スポーツをすることは重要だと思う				カイ2乗検定
年齢	性	n	あてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
子ども (4歳~11歳)	男子	834	73.5 ^a	24.1 ^b	1.4 ^b	1.0	$\chi^2(3) = 24.99,$ $p < 0.01$
	女子	729	62.3 ^b	32.9 ^a	3.4 ^a	1.4	
青少年 (12歳~21歳)	男子	831	64.4 ^a	30.3 ^b	3.6 ^b	1.7	$\chi^2(3) = 41.847,$ $p < 0.01$
	女子	760	51.3 ^b	35.9 ^a	10.0 ^a	2.8	

(%)

勉強			子どもが今の時期に勉強をすることは重要だと思う				カイ2乗検定
年齢	性	n	あてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
子ども (4歳~11歳)	男子	835	48.7	38.6	10.3	2.4	$\chi^2(3) = 1.449,$ n.s.
	女子	729	46.2	40.3	11.4	2.1	
青少年 (12歳~21歳)	男子	830	72.0 ^a	22.5 ^b	3.7	1.7	$\chi^2(3) = 7.973,$ $p < 0.05$
	女子	760	65.5 ^b	28.2 ^a	4.3	2.0	

注) aは残差分析の結果、度数が有意に多かったセル、bは度数が有意に少なかったセル

資料: 笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

【表E-2】運動・スポーツと勉強に対する保護者の考え方:あてはまると回答した割合の性・学校種別比較

性	園・学校種	子どもが今の時期に 運動・スポーツをすることは重要だと思う	子どもが今の時期に 勉強をすることは重要だと思う
		あてはまる (%)	あてはまる (%)
男子	幼稚園 (n=82)	73.2	20.7
	保育園 (n=80)	71.3	22.5
	小学校 (n=662)	73.9	55.7
	中学校 (n=299)	77.3	86.0
	高校 (n=236)	72.9	80.5
	大学 (n=140)	48.6	65.7
女子	幼稚園 (n=81)	58.0	24.7
	保育園 (n=61)	50.8	21.0
	小学校 (n=585)	63.9	52.1
	中学校 (n=242)	67.4	76.4
	高校 (n=235)	58.3	70.2
	大学 (n=126)	40.5	68.3
全体	幼稚園 (n=163)	65.6	22.7
	保育園 (n=141)	62.4	21.8
	小学校 (n=1,247)	69.2	54.0
	中学校 (n=541)	72.8	81.7
	高校 (n=471)	65.6	75.4
	大学 (n=266)	44.7	66.9

注)  は運動・スポーツをすること > 勉強をすること、 は運動・スポーツをすること < 勉強をすること

資料: 笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

の性差を検討した結果、「運動・スポーツをすること」の重要性については年齢にかかわらず、男子の保護者は女子と比べ、あてはまると回答した割合が有意に高かった。一方で、「勉強をすること」の重要性については、4歳～11歳の保護者では性差は認められず、12歳～21歳の保護者では男子の保護者は女子と比べ、あてはまると回答した割合が有意に高かった。

さらに、あてはまると回答した割合に着目し、幼稚園・保育園から大学までの割合の変化を確認すると、小学校までは「運動・スポーツをすること」を重要だと思う割合が

「勉強をすること」を上回っていたが、中学校以降は逆転した(表E-2)。そして、いずれの回答も中学校で最も高い割合を示し、「運動・スポーツをすること」が約7割、「勉強をすること」が約8割を示した。

これまで、漠然と学力重視・体力軽視、あるいは勉強重視・運動・スポーツ軽視といった社会風潮にあるといわれることがあったが、今回の結果からは勉強重視は中学校以降であり、小学校までは運動・スポーツ重視であることがうかがえた。ただし、中学校では運動・スポーツと勉強の両方を重視している様子もうかがえた。

E-2 運動・スポーツをすることに保護者が期待すること

文部科学省はスポーツ基本法の規定に基づき、2017年に第2期スポーツ基本計画を策定した。スポーツ基本計画に従ってスポーツ庁はスポーツ立国の実現を目指し、スポーツの価値を高めるための様々な取り組みを行っている。保護者は子どもが行うスポーツにどのような価値

を見出し、そして何を期待しているか。子どものスポーツライフを支える保護者がスポーツの価値をどのようにとらえているのかを把握する試論は、子どもの豊かなスポーツライフの実現に向けて重要である。

【表E-3】 運動・スポーツに保護者が期待すること

運動・スポーツに期待すること	子ども(4歳～11歳)				青少年(12歳～21歳)			
	男子(n=837)		女子(n=730)		男子(n=826)		女子(n=758)	
	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位
スポーツを楽しむ	77.5	②	74.8	①	71.2	②	68.3	①
スポーツ技術を身につける	25.2		20.1		24.5		19.5	
達成感を味わう	45.6		39.9		43.1		36.4	
体力をつける	79.6	①	74.8	①	74.0	①	64.0	②
からだを動かす	46.0		45.2	⑤	43.2		40.9	
チームワークを身につける	48.9		38.2		51.7		42.9	
目標を見つけてがんばる	49.9	⑤	44.5		50.8		42.0	
スポーツマンシップを身につける	16.7		10.5		21.2		15.3	
運動能力を高める	49.1		39.7		32.6		27.2	
運動不足を解消する	24.9		29.0		35.7		42.3	
礼儀・マナーを身につける	63.8	③	52.7	④	64.9	③	56.6	③
友だちをつくる	54.4	④	53.0	③	58.0	④	50.1	④
コミュニケーション能力を身につける	49.1		44.9		54.2	⑤	49.1	⑤
自分で考える力を身につける	41.2		35.1		41.8		33.4	

注) は50%以上の項目

資料：笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017

今回の調査では、子どもが運動・スポーツをすること（はじめること）に保護者が何を期待しているか質問し、14の選択肢に対して複数回答で回答を得た。4歳から11歳の子どもの保護者が最も多く回答した項目は「体力をつける（77.1%）」、次いで「スポーツを楽しむ（76.0%）」、「礼儀・マナーを身につける（58.4%）」であった。12歳から21歳の青少年の保護者では「スポーツを楽しむ（67.6%）」、次いで「体力をつける（67.0%）」、「礼儀・マナーを身につける（59.0%）」であった。

表E-3は男女別に選択肢すべての回答をまとめた結果である。表には回答した割合の高かった5項目に順位をつけたが、性・年齢による順位の違いはほとんどないとい

える。それぞれの選択肢に対して半数（50.0%）を超える保護者が回答したのは、4歳から11歳では男女とも4項目、12歳から21歳では男子で7項目、女子で4項目であった。50.0%を超える回答に着目すると、「体力をつける」や「スポーツを楽しむ」といったスポーツそのものによる効果を期待している回答と、「礼儀・マナーを身につける」や「友だちをつくる」といったスポーツ場面での指導者や友達との人間関係を期待している回答に大別できる。保護者は多様なスポーツの価値を認め、子どもに対してスポーツを通じた心身の成長を期待している様子が見えてきた。

E-3

保護者の考え方に影響を及ぼす要因

保護者の考え方が子どもの行動に影響を及ぼすことはいくつかの研究によって報告されているが、はたして保護者の考え方はどのような要因に左右されて確立するのだろうか。保護者の考え方に影響を及ぼす要因を明らかにし、その要因を変えることができれば、子どもの運動・スポーツ環境の改善につながると考えられる。

今回の調査では保護者の運動・スポーツ活動歴について質問している。活動歴については小学校時代、中学校時代、15～17歳頃、18～22歳頃の4期に分けて回答

を得た。保護者の回答結果から、特に運動・スポーツをしていなかった群と、部活動やクラブ等への加入の有無に関わらず何かしらの運動・スポーツ活動歴のある群に分け、「子どもが今の時期に運動・スポーツをすることは重要だと思う（あてはまる）」と回答した割合を比較した（表E-4）。総じて、していなかった群よりもしていた群の保護者において、子どもが運動・スポーツをすることを重要視している状況が見えてきた。特に、統計的な有意差に着目すると、4～11歳の女子を除き、いずれかの年代に

【表E-4】保護者の運動・スポーツ活動歴別にみた「運動・スポーツをすることは重要である」と回答した割合

保護者の 運動・スポーツ活動歴		子ども（4歳～11歳）				青少年（12歳～21歳）			
		男子		女子		男子		女子	
		n	%	n	%	n	%	n	%
小学校時代	していなかった	226	67.7	207	62.3	249	58.6	215	51.6
	していた	607	75.6	515	62.3	578	66.8	537	51.0
中学校時代	していなかった	163	68.7	149	56.4	166	54.2	151	52.3
	していた	668	74.6	577	63.8	661	67.0	609	51.1
15～17歳頃	していなかった	381	72.2	316	63.6	371	61.7	325	46.8
	していた	447	74.5	406	61.1	450	67.1	427	55.3
18～22歳頃	していなかった	483	70.0	419	63.5	476	63.2	411	49.4
	していた	337	78.6	289	60.2	332	67.5	328	54.6

注）*は Fisher's exact test によって有意差が認められた集団

資料：笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017

運動・スポーツを実施した経験は我が子の運動・スポーツ実施の重要性に関する強い認識につながっている実態が示唆された。

また、表E-3で示した運動・スポーツに期待することについて、わが子が「運動・スポーツをすることが重要である」と回答した保護者に限定して集計すると、表E-3の回答と比べて、「運動不足を解消する」の回答を除き、すべての項目で高い回答率となった(表E-5)。回答率が50.0%を超える項目は、4歳から11歳では男子で9項目、女子で5項目、12歳から21歳では男子で9項目、女子で7項目であった。わが子が「運動・スポーツをすることが重要である」と考える保護者は、運動・スポーツに対して多くの期待を抱いていると推察された。ただし、その期待は運動不足の解消といった健康に関わる期待というよりも、楽しむ、達成感、目標を見つけてがんばるといった心情面や友だちをつくる、チームワークを身につける、コミュニケーション能力を身につけるといった人間関係の構築に関わる期待が強い傾向にあった。

この調査では、子どもたちを取り巻くスポーツ環境等について自由記述式で回答を得ているが、その回答の中には「保護者が子どもの頃と周辺環境が変わり自由に遊べる場所が少ない」といった回答や、「親がスポーツ環境に関わりすぎている」といった主旨の回答が散見された。すなわち、身近な場所で自由に身体を動かすことができる環境を通して、子ども同士の関わり合いの中でさまざまな社会的相互作用を経験し、身につけて欲しいという思いが感じられる。しかしながら「子どもだけでは安全に遊べる場所がない」といった回答もあるように、近年では習いごとや学校部活動が体を動かす場として重要な役割を果たしている。習いごとや学校部活動は指導者がいたり、保護者が関わったりする環境が一般的であるが、体力の向上や技術の習得だけでなく、保護者の心情面や人間関係に関わる効果への期待を勘案すれば、習いごとや学校部活動のあり方を再考する必要性があろう。

【表E-5】 運動・スポーツに保護者が期待すること
 (「運動・スポーツをすることは重要だと思う」にあてはまると回答した保護者のみ)

運動・スポーツに期待すること	子ども (4歳～11歳)		青少年 (12歳～21歳)	
	男子(n=614)	女子(n=453)	男子(n=534)	女子(n=390)
スポーツを楽しむ	82.4	79.5	76.6	74.6
スポーツ技術を身につける	30.5	24.1	32.4	28.5
達成感を味わう	52.0	44.8	51.9	46.2
体力をつける	82.7	77.5	78.5	73.1
からだを動かす	48.2	49.7	44.6	41.3
チームワークを身につける	53.3	42.8	60.3	56.7
目標を見つけてがんばる	54.1	52.5	60.7	53.8
スポーツマンシップを身につける	19.4	13.7	28.7	24.1
運動能力を高める	54.7	44.4	41.6	37.2
運動不足を解消する	25.4	29.8	31.6	34.1
礼儀・マナーを身につける	67.1	56.7	73.6	69.2
友だちをつくる	56.4	55.4	63.7	52.3
コミュニケーション能力を身につける	51.5	49.9	57.1	55.6
自分で考える力を身につける	44.3	39.7	50.2	42.8

注)  は50%以上の項目

資料：笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017

E-4

まとめ

スポーツ庁の体力・運動能力調査によると、1970年後半から1980年前半までの子どもたちの体力は高いという結果が示されている（スポーツ庁，2017）。そして現在50歳以上の成人は体力が高いとも報告されており、この結果は子どもの頃に体力の高かった世代が成人しても体力が高いことを意味している。すなわち、子どもの頃の体力は成人期へ持ち越される。子どもの頃の身体活動（運動・スポーツ）も体力と同様に成人期へ持ち越される（鈴木，2011）。子どもの頃の体力を支える運動・スポーツ、そして子どもの運動・スポーツを支える保護者の考え方、そしてその保護者の考え方を支えているのは、保護者自身の子どもの頃の運動・スポーツ経験であると考えられる。

本稿では保護者の考え方について、子どもが運動・スポーツをすることを重要であると考えているか、そして運動・スポーツをすることに何を期待しているかの2つに着目して分析した。その結果、保護者の多数が子どもにとって運動・スポーツをすることが重要であると考えている

実態が明らかとなった。また、重要性を認識している保護者ほど、子どもの運動・スポーツに対して多くの期待を持っている様子が確認できた。さらには、子どもの頃に運動・スポーツをしていた保護者では、運動・スポーツを特にしていなかった保護者よりも子どもの運動・スポーツ実施の重要性をより多く認識していた。

スポーツ庁ではスポーツ立国の実現に向けて、スポーツの価値を高めるための取り組みが行われている。今回の調査結果からは、子どもの頃の運動・スポーツ活動経験は、保護者になってからのわが子への運動・スポーツ推進に結びつく可能性が示唆された。すなわち、子どもの運動・スポーツ実践に関する問題を議論する際には、長期的な視点で子どもの今を考えるべきである。そして、運動・スポーツの価値を認め、重要であるとする大人、すなわち、将来子どもの運動・スポーツ環境を支える大人を増やす方策として子どもの今の運動・スポーツを考える必要があるかもしれない。

<参考文献>

- 笹川スポーツ財団 (2015) 子どものスポーツライフ・データ2015-4~9歳のスポーツライフに関する調査報告書ー。 pp16-21
- Jessica Mitchell, Helen Skouteris, Marita McCabe, Lina A. Ricciardelli, Jeannette Milgrom, Louise A. Baur, Matthew Fuller-Tyszkiewicz & Genevieve Dwyer (2012) Physical activity in young children: a systematic review of parental influences. *Early Child Development and Care* Vol. 182, Iss. 11
- Xu H, Wen LM, Rissel C (2015) Associations of parental influences with physical activity and screen time among young children: a systematic review. *J Obes.*: 546925. doi: 10.1155/2015/546925. Epub 2015 Mar 19
- 文部科学省 (2017) 平成29年度学校基本調査（速報値）の公表について
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/08/03/1388639_1.pdf
- スポーツ庁 (2017) 平成28年度体力・運動能力調査報告書
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1396900.htm
- 鈴木宏哉 (2011) おとなに持ち越される子どもの頃の身体活動。子どもと発育発達, 9: pp8-14